

フランス料理の技術でやろうとすると、魚の骨を焼いて濃厚な出汁を発想するが、若い彼の引く出汁はさっぱりとしていて、私の引く出汁に比べて薄い。こうした和食とフランス料理の違いを知るのはおもしろい。

毎月京都へ行き、彼がつくる料理を食べ、意見を伝える。彼も八人の仲間の一人だ。

それ以外に取り組んでいることもある。二〇一六年に奈良県の荒井正吾知事から依頼されて「なら食と農の魅力創造国際大学校」の校長に就任し、いまは名誉校長を務めている。「農業生産という川上から、農産品を使った料理という川下までを合わせた学校をつくりたい」という荒井知事の構想に共鳴したのだ。

さまざまな経歴の学生が集まる教育現場は打算が通用しない世界だ。胸が震えるような感動に出くわすこともあった。

脱サラして農業を学んだある卒業生は、四十歳近い年齢で古都華というブランドの苺の生産を始め、苺農家として腕を上げた。春のガラディナーには彼の苺を使い、お客様に喜ばれた。

家庭の事情で学校を辞めなくてはならなかった青年が柿農家になり、素晴らしい柿を持って会いにきてくれたときには涙が出た。

仲間と友達は違う。同じ方向を目指し同じフィロソフィを持って一緒にやれるのが仲間だと思う。仲間をつくるために七十歳までがんばってきたのだと今、思えてい

る。まだ見たことのない「明日つくる料理」を求めて、まだ当分は仲間と厨房にいるつもりだ。

「映像の世紀」の音楽とは

加古 隆
(作曲家・ピアニスト)

私は日本とフランスの音楽大学で作曲を学び、いまは自作の曲をコンサートで演奏する一方、映画やテレビの音楽も手がけています。NHKスペシャル「映像の世紀」のテーマ曲「パリは燃えているか」が生まれたのは一九九五年。初回の放送が終わるや否や、テーマ曲の問合せが局に殺到したと聞き、とてもうれしく思ったものです。

番組は「新・映像の世紀」「映像の世紀プレミアム」とシリーズ化されました。その大きな魅力は、変わらず流れる私の曲だと言われることもありすが、なによりも素晴らしい番組と出会ったから、ここまで知られるようになったわけで、とても幸せな曲だと思っています。

「パリ燃え」のモティーフが最初に浮かんだときは、ショパンの「雨だれ」のようにとても哀しげな雰囲気だったのだ、ドキュメンタリー番組にはふさわしくないと、諦めかけていました。まさにその時、番組のオープニングを飾る短いCG（コンピュータグラフィックス）の映像が届いたのです。歴史上の人物や事件の名前や写真などがスピーディーに飛び交う、非常に

斬新なカラージュ・デザインを繰り返し見ているうちに、「そうだ、あのメロディーをもっとテンポを上げて勇壮に演奏してみたらどうだろうか」と思いつき、CG映像を見ながら力強く弾いてみたのです。ああ、この曲でいける！と思った瞬間でした。

世界各国に残された映像と歴史を作り上げた人間。それらに思いを馳せながら、百年という壮大な時のロマンを謳う、という思いでオーケストラ作品に仕上げました。気持ちとしては「アラビアのロレンス」のような大河歴史映画のテーマ曲を目指しました。

番組では世界中のあらゆる国や民族の映像が出てくるので、それに合わせたリズムなど、多くの音楽要素が必要です。ご担当者からは、「百年

だから百曲作って……」という話があったので、アレنجジ違いなどを含めて本当に百曲まで作ったら、「百と言ったら二十数曲は出てくるかなと

今を生きる

薔薇一輪分り合うには子は幼し
祈るなり苺のジャムに粘度あり
かたばみやあくびのときは息吸えず
歳時記に開き癖ある素足かな
逡巡に沈黙長し濃紫陽花
線路に従う電車のあわれ夏の空
子は今を最も生きてレモネード

思っていた」と、後で聞かされました。

「パリは燃えているか」という曲名は、第二次世界大戦時、ナチス・ドイツが、パリ

を破壊しようとした作戦に由来しています。爆破を命じたヒトラーが、パリを占領していた部下に、「燃えているか」と聞いたとされています。

越智 友亮

自分の留学中の体験を通

し、「パリ」という言葉からは人間の生活や文化、ひいては歴史を象徴的に感じますし、「燃えているか」という

言葉には、同じ人間の繰り返し戦争や破壊のイメージが暗示されています。しかし、パリの運命は消されることなく現在、私達の前に残されているのです。

今年の春から新シリーズ「映像の世紀」バタフライエフェクト」がスタートしたのですが、そのために新たなテーマ曲を要請されました。

歴史というと、国家や社会、民衆といった大きな枠組みで語られるのが普通です。でも「バタフライエフェクト」は、一人の人間の想いや決意、行動が、さまざまな連鎖を生んで歴史が作られていく、という視点で作られています。だから、もっとヒューマンな思いがクローズアップされるのではないかと想像して、作曲のコンセプトにしました。

ジミー・カーター
米元大統領が推薦!

Moonshot

ファイザー 不可能を可能にする9か月間の闘いの内幕

売れています!

Moonshot



ファイザー・会長兼CEO
アルバート・ブーラ

DR. ALBERT BOURLA
Chairman and CEO, Pfizer

光文社

https://www.kobunsha.com/

世界初のmRNA新型「コロナワクチン」開発の
舞台裏を、ファイザーCEOが自ら語る。
未曾有の状況でのリーダーシップの物語。

【四六判ソフトカバー】1870円(税込み)

詩集」(マドンナ役は京マチ子)の時など、フランス人の観客の中にも目頭を押さえる姿が見られたことであった。なぜ、「寅さん」がこのようにフランス人に受け入れられるのだろうか。鑑賞後に寄せられた観客の感想で印象に残ったのが、「自分たちが育ったフランスの風景とは違うが、何だかとても懐かしい」というものだった。日本ほど急速ではないものの、フランスでも都市郊外のスラム化が進むなどし

て、昔ながらのコミュニティが失われるケースが少なくない。そうしたなかで、シリーズで描かれている葛飾柴又という下町をはじめとする日本各地の「原風景」は、フランス人に「失われたものへの郷愁」を感じさせているようだ。また、二年余におよぶコロナ禍も少なからぬ影響を与えていると感じる。何かといえば「対面でなくリモートで」ということで、確かに便利にはなったものの、その反面で

人と人の結びつきが希薄になっっているのは否めない。これに対し、寅さんはじめ登場人物が、時には余計なおせっかいなほど相手のことを思い、何とか役に立ちたいと必死になる様子は、人と人の心が通い合うぬくもりを感じさせているようだ。さらに、コロナによって長い間日本に行けない状態が続いていることも、日本が大好きで、最近ではお仕着せの観光コースに飽き足らずに地方の秘境を訪れる場合も多いフランス人にと

っての一種の代償行為となっているようで、「映画を見て一日も早くまた日本に行きたいという気持ちが強くなった」という感想も多く聞かれる。予想以上の(?)シリーズの好評に、山田洋次監督が特別に観客へのメッセージを送ってくださり、「パリはなんととっても映画人にとって、歴史上最初に映画が上映された憧れの都市だ。そのパリで寅さんシリーズが五〇作全部上映される、こんなに嬉しい

「パリは燃えているか」とは異なった世界観を持ちつつ、同じように大きな歴史の流れを感じられるような曲を書きたいと取り組んだのです。今回のメロディーを見つけた時は、大海原を、風に吹かれ航海してゆく情景が浮かびました。その大海原は「時間の海」であり「歴史の海」で、海面に光が反射して輝いている。そのイメージから曲名も「グラン・ボヤージュ」(大なる旅)と名付けました。旅という言葉からは、希望とまでは言わないまでも、どこか前向きな気分を感じますし、それはこの新曲に込めた私の思いに通じています。番組のスタート画面には美しいブルの「蝶のはばたき」が毎回登場し、そこにこのメロディーの冒頭部分が重なり合っ

大変印象的なシーンになりました。映像の為の音楽は、曲が良いだけでは十分でなく、その映像作品にどれだけ貢献できているかという事が大切だと常々思っています。

寅さん、

パリっ子を魅了

鈴木 木 仁

(パリ日本文化会館館長)

日本映画の名作「男はつらいよ」は、「ひとりの俳優が最も長い期間にわたって主人公を演じ続けたシリーズ」としてギネスブックにも掲載されている。しかし、海外、とりわけフランスでは、黒澤明や小津安二郎などの巨匠や、最近の是枝裕和や河瀬直美などの作品に比べて知名度が低かった。

海外における最大級の日本文化紹介拠点として一九九七年に官民一体の「オールジャパン体制」で発足したパリ日本文化会館では、開館二五年を迎えた今年、「Tou au avec Toru san」(寅さんとの一年)と題して、「男はつらいよ」全五〇作品の海外初の完全上映を行っている。観光名所のエッフェル塔近くにある会館の壁面には、長さ一五メートル、幅七メートルの巨大な寅さんの広告が掲げられ、行きかう人々の関心を集めている。とは言ってもシリーズ上映開始前は、寅さん独特の「結構毛だらけ猫灰だらけ……」「たいしたもんだよ蛙の小便……」などといった威勢の良い吠えやダジャレを含んだ独特のセリフ回しをフランス語

字幕に的確に訳すのはほとんど不可能であり、作品が果たしてフランス人の観客に理解され、面白がってもらえるのだろうかという不安もあった。しかし「案するより産むが易し」とはよく言ったもので、渾美清はじめ、個性的な俳優陣のコミカルな口調やオーバーなジェスチャーなどにフランス人の観客から大きな笑い声が上がることもしばしばである。コロナ禍で鑑賞時のマスク着用が義務付けられていた時期には、「笑いすぎで飛沫がマスク越しに飛ばないか」などと心配になるほどだった。だがもっと驚いたことは、寅さんとマドンナが珍しく「両想い」となるものの悲しい結末に終わる「寅次郎純情